

# 『夫木和歌抄』の資料となった『和泉式部集』

藤川晶子

はじめに

『夫木和歌抄』（以下「夫木抄」と略称する）の採択歌には、「家集」という集付が施されたものが多い。もとより「夫木抄」には一万七千首を超える歌が収められており、その膨大な全体像から見ても集付にも誤脱、誤認の類の存することは想像に難くない。しかし、その集付に注目することによって、現存とは別系統の家集の存在が窺われたり、現在では家集の伝わらない歌人のそれが想起されたりといった、興味深い問題を内包していることも事実である。

『夫木抄』に百首あまりが収められている和泉式部歌においてもまた、集付が見られ、その中には、現存「和泉式部集」（原則として「和泉式部正集」「和泉式部続集」を総合した場合の呼称とする。以下同じ）に見られない歌が含まれることなどから、これまでに次のような説が出ている。

まず、この問題に最初に言及したのは、山田清市氏である。「夫木抄」の資料とした「和泉式部集」について、氏は「現歌集と内容形態を異にする日記の素材となった祖歌集とも言うべきものが明らかに存在し」「祖歌集は現歌集の如く正統二集の様に分割せず、高次の一群をなして結合しており又現歌集に存在しない歌を百首前後、明らかに有していた」と結論づけられた<sup>1)</sup>。

その後、吉田幸一氏も「和泉歌も主として現存家集（特に正集は、定家・民部卿局筆奥書本）に依つてゐることは、ほぼ間違ひないと類推される。」とされながらも、「夫木抄」の資料が、現存家集とは別個の家集に依つてゐる点もないとはいへない。現に少なくとも、家集未載歌の中には、現存以外の家集から採られたものと思しきものがある」と、「夫木抄」が現存本以外の家集を資料としていた可能性をも示しておられるのである。

しかし、果たして「現存家集とは別個の家集」を、わざわざ想定

する必然性はあるのだろうか。本稿においては、これら従来の説から離れ、私なりに「夫木抄」所収和泉式部歌全体の様相をいくつかの角度から検討することによって、「夫木抄」が資料とした「和泉式部集」について、改めて考察を加えてみたいと思うのである。

### 一、資料としての現存「和泉式部集」を示唆する

#### 「家集」の集付

「夫木抄」所収和泉式部歌に「家集」と集付されたものが多いことは前述したが、一方で、集付に「家集」と示されない歌も、合計二十四首あることに気付く。これらの歌の出典を考えることによつて、逆に「家集」の実態に迫ることができないだろうか。

まず、「家集」以外の集付を持つ歌を探り上げてみたい。

#### 名所歌五首、人のよみ侍りけるに、なみだのはま 万代

#### 和泉式部

△二五〇〇 わが袖はなみだのはまにあさりせしあまのたもとにおとり

やはする

この歌は、現存「和泉式部集」(二二四〇)にも見られるが、歌句は「夫木抄」と完全に一致するものの、その詞書には「人のよませし なみだのはま」とあり、多少異なっている。一方、集付にあるように「万代集」(二三三二)にも入集する。詞書には「名所歌

五首、人のよませ侍りけるに、なみだの涙を」とあり、歌句も全く「夫木抄」に一致する。当該歌は集付の通り、「万代集」からの引用と見るべきではないだろうか。

次に、「雲葉」と集付されている歌を掲げよう。

#### 秋歌中 雲葉

#### 和泉式部

△六〇七 おしなべてまだまゆみの色づくはいる日をうけて露やを

くらん

「和泉式部集」では(八三〇)に同様の歌が見られるが、詞書は「まゆみいろづきたり」、歌初句が「きしよりも」、四句が「秋に入る日に」とあり、「夫木抄」に比べて、かなりの違いが認められる。しかし、「雲葉集」(六六六)では「秋歌に」の詞書のもと、歌句も「夫木抄」と完全に一致する形で収められており、この場合もやはり、集付にある通り、「雲葉集」が資料とされたと言い切つてよいと思われるのである。

もう一例、掲げておく。集付は脱しており見当たらないが、明らかに「和泉式部集」以外の資料からの撰入と判断される歌である。

#### 百首歌中に

#### 和泉式部

△七二五 つれづれと空ぞみらるるおもふ人あまくだりこん物ならな

くに

現存「和泉式部集」では、(八一)に、百首歌恋部の一首として

入集する。ただ、(八一)の歌の直前には詞書が付されておらず、

この歌だけを見ている限りでは、百首歌中の一首であるとは気付きにくいと思われる。と言うのは、同じ歌が「夫木抄」(前掲歌と同じく「恋」部)にもう一首入集しているからである。

家集

和泉式部

△七五△つれづれと空ぞみらるるおもふ人あまくだりこん物ならな

くに

こちらには「家集」と集付されており、また、詞書も付されていないことから、「和泉式部集」からの採択であることに間違いない。先の歌は、別の詞書をもって別の場所に収められているのであるから、やはり「家集」以外の出典を考へるべきかと思う。

ところで、この歌は「万代集」にも入集している。

百首の歌中に

和泉式部

(三〇) つれづれとそらぞ見らるるおもふひとあまくだりこむもの

ならなくに

一見して、「夫木抄」(七一)との一致が知られるであろう。集付は脱しているが、「万代集」を資料としたものと考えてよいのではないか。

その他、「家集」以外の集付によって、「和泉式部集」以外の出典が想定される歌に、「夫木抄」(四四六八) (六四三三) がある。

秋歌中 明玉

和泉式部

△四六△ 萩風の露ふきむすぶ秋の夜はひとりねざめのとこぞさびしき

題不知 古来歌合

和泉式部

△四三△ ちりはてて一葉だになき冬山は中中風の音もきこえず

それぞれ、現存「和泉式部集」(一三二二) (二二二九) に入集するが、歌句は一致するものの、詞書を順次掲げると「八月ばかり、夜ひとよ風ふきたるつとめて、いかがといひたる人に」「冬山」とあり、「夫木抄」における詞書と異同が存する。「明玉集」「古来歌合」ともに、「代集」などにその名がみえるものの散佚して伝わらず、「夫木抄」所収本文との比較はできないが、これらの歌もやはり、それぞれの集付に記された歌集が出典であった蓋然性が高いと思われるのである。なお、「家集」の集付を持ちながら、さらに他の出典をも示す集付がなされている和泉式部歌が三首あるが、これらについては後述する。

今まで採り上げてきた中に、集付が施されていないにもかかわらず、おそらく「万代集」からの採択であろうと思われるものが一例あるが、それ以外の、集付を持たない和泉式部歌の出典は、どこに求められるであろうか。

灯の前に花をおもふといふころを 同(和泉式部)

〈三五九〉夜のほどにちりもこそすれあくるまでほかげに花をみるよ  
しもがな

この歌は、現存『和泉式部集』（四六一）に「燈の前に花を思ふと云ふ心」の詞書のもとに収められており、「夫木抄」と詞書がほぼ一致するばかりか、歌句の異同もない。

はやうみし人の、物語などしてかへりて、扇をおとしたるをやるとて  
同（和泉式部）

〈三三〇〉うらさびでとりだに見えぬ鳥なればこのかはほりぞうれし  
かりける

現存『和泉式部集』では、（二〇六八）に収められ、「みやにてはやうみし人の、物語などしてかへりて、扇をおとしたる、やるとて」の詞書を持つ。やはり歌句の異同はなく、詞書にも小異あるのみであつて、「夫木抄」が現存『和泉式部集』当該歌に擬っているのは明白なのである。

また、  
〈三六一〇〉神山のまさきのかづらくる人ぞまつやひらでのかずはかく  
るる

此歌は、神祭日、人人きて、かしはのあるをととりて、歌かきてとせめければよめると云云

の場合、その左注に注目される。現存『和泉式部集』（七八一）

詞書には「かみまつる日、人々きて、かしはのあるをととりて、うたかきてとせむれば」とあるが、「夫木抄」がこれを左注として採り入れた際、末尾の「せむれば」を「せめければ」と、間接的表現に改めたと思われる以外は、細部に至るまで、その言辭が一致しているのが知られるのである。もちろん、歌句の異同はない。

次の歌はどうであろうか。

同（文永八年毎日一首中）

和泉式部

〈三三二〉とをつらの馬ならねども君がのるくるまもまに見ゆるな  
りけり

此歌は、祭の日、あるさんだちの、まとのかたを車のわに作りたるをみてよめると云云

『夫木抄』詞書に「同」とあるのは、素直に解釈すれば、直前に配列されている為家歌の詞書「文永八年毎日一首中」を承けるものとするしかないが、言うまでもなく文永八年の和泉式部詠は奇妙である。

一方、この歌も、現存『和泉式部集』（二〇八三）に所収する。

『夫木抄』と同じ歌本文に、「まつりの日、あるさんだちの、まとのかたをくるまのわにつくりたるをみて」の詞書が付されており、

『夫木抄』左注との一致は明らかである。つまり、「同」の詞書は、その出典が「家集」であることを示すものと考えるのが妥当なので

ある。

以上のことから、「夫木抄」所収和泉式部歌全体を通じて、

(1) 「家集」以外の出典を示す集付が施されているものは、ほぼ確実に、その集付通りの作品が典拠になっている。

(2) 集付を脱しても現存「和泉式部集」に典拠が見出せる歌が多いことから、「夫木抄」は和泉式部歌採撰の資料として、現存本と同様な形態の「家集」を中心に用いていたと考えられる。

(3) 従って、「家集」という集付を持つ和泉式部歌の出典も、現存「和泉式部集」に求められる可能性が高い。

ということが知られるのではないか。これらを踏まえた上で、次章では、「家集」からの採撰と判断される歌を中心に、別の観点から現存「和泉式部集」との関係を見ていきたい。

## 二、現存「和泉式部集」の配列・叙述形態を反映する歌

清水文雄氏によれば、「後拾遺集奏覧年以前に、和泉式部集（現在の続集）一篇が成り、はるかに後れて、千載集撰進年以後に、他の歌群の若干を結集して、別の家集（現在の正集）が成立した」とされる。これに従うなら、「夫木抄」が現在と同じ形の「和泉式部集」を資料として用いても、不思議はないと考えられる。

このことをも今一度確認した上で、本章では、現存「和泉式部集」

が「夫木抄」の資料と言いつるかどうか、さらに検討してみたい。

くにぐににある所をよみけるに、さやか山

和泉式部

〈六二四〉名にしおへばことにあかくもみゆるかなさやか山よりいづ

る月かげ

現存「和泉式部集」では、(二四四二)〜(二四四八)が、「人々、国々にある所をよませしに」の詞書のもとにまとめられている。山城及び摂津の名所歌群である。前掲歌は、(二四四二)に相当するが、直前には「さやか山」と詞書されているに過ぎない。すなわち、「夫木抄」が「くにぐににある所をよみけるに」としているのは、「和泉式部集」(二四四二)の前に記されていた詞書を引用したものと見るよりほかはない。「夫木抄」には、この名所歌群中の歌が、計四首採られているのであるが、たとえば「夫木抄」(九五〇二)の詞書に「家集、やましろのもどりばしを」とあり、同(二〇〇八〇)のそれに「家集、山城、あめのもり」とあるのについても、「もどりばし」や「あめのもり」が「山城」の名所であることを示すのは、僅かに「和泉式部集」(二四四二)の前に付された「山城」という一語に過ぎないのである。

次に、

家集、権中納言・家屏風歌、人の家に、琴引き、笛吹きて、

遊びしたり

和泉式部

△三五二〇 書く人のみみさへさむき秋かせに吹きあはせたるふえのこ

あかな

この歌は、現存『和泉式部集』(八五二)と(八六五)に入集する歌群の中の、(八五九)に該当する。しかし、その詞書には「人の家に、琴引き、笛吹きて、遊びしたり」とあるだけであつて、「権中納言家屏風歌」の一首であることは、(八五二)の詞書によつてしか知られない。

また、

家集、絵に、橋立に、馬に乗りたる人ある所

和泉式部

△三五六一 こまならん人はなれたり行へなく舟ながしたるあまのはし  
立

この歌は、現存『和泉式部集』(七六三)に見出せるが、その詞書には「橋立に、馬に乗りたる人ある所に」とあるだけである。もちろん、「……所に」という表現から、当該歌が屏風歌であることは推測できるが、しかし、屏風絵に付された歌であることを決定づけるのは、『和泉式部集』において直前に配列されている(七六二)の詞書「絵に、花浪といふ所をかきたるに」であろうと思われるのである。

以上、現存『和泉式部集』において、歌群としてのまとまりが強いものを例として採り上げてきた。ここに掲げたものは一部に過ぎないが、『夫木抄』が現存『和泉式部集』と同じ配列を持つていた家集に基づいて採歌したと思われることは、明らかにしえたのではないだろうか。

ところで、前章において、「家集」と集付されない歌であつても、その歌句及び詞書、もしくは左注が、現存『和泉式部集』に一致することを述べた。それが、「家集」と集付されている和泉式部歌においても同様であることを、比較的長大で具体性を持つ詞書を採り上げることによつて確認しておきたい。

家集

和泉式部

△三五七二 わがやどはすがはらのべとなりけりいかにふしみへ人の  
行くらん

この歌は、すみなれて侍りける所にほどへだててまかりてみけるに、萩薄も、萩のませのあとも、みなこぼれければよめると云云

この歌は、現存『和泉式部集』では、

四日、例の所にわたりたれば、みざりつるほどに、萩薄も、萩のませなども、みなこぼれにければ

(二五〇) 我が宿はすがはら野辺となりけりいかにふしみて人のゆ

くらん

とある。これは、「日次歌群」と通称される歌群中に入る歌であり、詞書に、前後の歌との連続性を示す「四日」という日付が付されており、また、「例の所」という漠然とした表現もなされている。「夫木抄」では当該歌を独立した歌として採り入れるにあたって、「四日」を排し、「例の所」を「すみなれて侍りける所」と改めることによって、「和泉式部集」の詞書をまとめ直している感があるが、単純な誤写に起因すると思われる。「ふしみへ」「ふしみて」の相違以外には、相方、歌句に異同が見られないのをはじめ、「和泉式部集」詞書と「夫木抄」左注の表現が酷似していることは、明らかと言えるのではないだろうか。

家集

和泉式部

〈三三三〉白露と置きまどはすな秋くとものにあふぎの風はことなり

此歌、水無月のつこもりがたに、六波羅の説法、まきにまかりたる人、あふぎを取りかへて、やるととて云云の場合、現存「和泉式部集」では次のようになってい

みな月の晦がたに、六波羅の説経、聞きにまかりたる人の、扇をとりかえて、やるととて

（二三三）白露におきまどはすなあきくとものにあふぎの風はこと

なり

傍点を付したように、些細な異同はあるものの、「夫木抄」の左注と「和泉式部集」の詞書が共通していることは、さらにはつきりしている。

また、

家集

和泉式部

〈三三三〉うゑおきしわれやは見べき花すすきあしのほにだにいださずもがな

此歌は、津国難波わたりに、薄を植置きて、京にきたるに、かの国よりおひにたりといひたるかへりごとにと云云

の場合は、現存「和泉式部集」に、

津のくにといふ所に、すすきをうゑおきて、京にきたるに、かのくによりおひにたりといひたるかへりごと

（七三三）うゑおきしわれやはみべき花すすきあしのほにだにいださずもがな

とあるのに、相当する。また、「夫木抄」に前掲歌と並んで、配列されている次の歌、

同（家集）

同（和泉式部）

〈三三三〉過行けどまねくを花もなかりけりあはれなりしは花のをり

かな

此歌は、こぞの春石山にまうでたりしに、山中にとまりてやすみなどせしを、又のとしの秋まへをわたるに、さぞかしとおもふに、あはれにて、とはすれば人なし、すきぞなさけなげにすくみてたてるに、かきてむすびつくと云云

の場合は、現存「和泉式部集」では、

こぞの春石山にまでたりしに、山中にとまりてやすみなどせしを、またのとしの秋まへをわたるに、さぞかしとおもふに、あはれにて、とはすれば人なし、すきぞなさけなげにすくみてたてるに、かきてむすびつくと

(八四六) すきゆけどまねくをばなまかりけりあはれなりしは花のをりかな

となつてゐるのだが、両者の一致はあまりにも明らかであり、「和泉式部集」の詞書が、そのままに「夫木抄」の左注として採り入れられていることが知られるのである。

では、ここで、現存「和泉式部集」の歌番号を表に示して、「夫木抄」入集歌の状況をも確認しておきたい。

400 E 902					312 D 399	269 C 311	99 B 268	1 A 98	歌群	
835	746	640	521	(435)	330	279	99	75	14	「夫木抄」入集歌
846	748	667	523	458	331	279	110	77	16	
859	762	673	525	461	360	281	(116)	81	24	
860	763	674	526	469	(375)		139	81	28	
(875)	781	677	572	476	(376)		(164)		37	
884	797	678	582	503			(194)		41	
885	815	683	589	506			(215)		54	
895	823	691	592	510			254		67	
	832	724	624	518			261		71	
1471 J 1549		1334 I 1470			1062 H 1333		940 G 1061	903 F 939		
1499	1500	1516	1447	1336	1240	1065	943	該当歌ナシ	「夫木抄」入集歌	
			1449	1351	1254	1068	962			
			1461	1388	1258	1083	972			
				1390	(1276)	1089	974			
				(1429)	1312	1092	983			
				1439		1095	1034			
				1442		1143				
				1444		1227				
				1445		1229				



〔注〕\*数字はすべて清水文雄氏「校定本和泉式部集（正・続）」

による歌番号。便宜上設けた上段のA―Jの歌群分類も、

清水氏に従って示した。

\*括弧を付した歌番号は、「和泉式部集」における重出歌であり、もう一方の所収歌を「夫木抄」が参考にしたと判断されるものである。

\*二重括弧を付した歌番号は、「和泉式部集」における重出歌であるが、「夫木抄」がいずれを参考にしたか判断しがたいもの。ゆえに、重出歌両者に二重括弧を付してある。

\*同じ数字が二度あるのは、「夫木抄」に二度わたって採歌されていることを示す。

一見して知られるように、「夫木抄」所収和泉式部歌は、現存「和泉式部集」全体にわたって、片寄りなく分布するのである。

このように見えてくると、「夫木抄」が現存「和泉式部集」と同様の配列及び叙述形態を持つ「家集」——とりも直さず、現存「和泉式部集」に限りなく近い「和泉式部集」——を資料としていたことは明らかというほかないと思えてくるのである。

### 三、家集未載歌の位置付け

前章末尾で「現存『和泉式部集』に限りなく近い」という歯切れの悪い表現を用いたのは、やはり、「家集」と集付されながらも、現存『和泉式部集』には見出せない歌（以下、これらを便宜上、「家集未載歌」と称す）が、「夫木抄」に三首入集するからである。

家集、述懐 古来歌合

和泉式部

〔五六六〕かくしつづ在りふる程に身の露やたまりてしづむふちとならん

家集

和泉式部

〔六七三〕ふれば世のいとうき身のしらるるをけふなが雨に水まさらん

家集

和泉式部

〔三五四〕いまはよもききもせじかしおほ水のふかきこころは河と見せつ

まず、最初に掲げた「かくしつづ…」の歌の場合、「家集」と並んで「古来歌合」と集付されているのに気付く。先にも触れたが、「家集」とありながら、他の出典をも示す集付がなされている歌が、「和泉式部集」では「かくしつづ…」も含めて三首あるが、うち二首は「古来（歌合）」という集付を持っている。このように、「古来

歌合」と「家集」の集付が並存する例は、「夫木抄」全体を通して、和泉式部歌に限らず多く見られるが、「古来歌合」は散佚してしまっており、詳しい論究はできないので、「家集」と「万代」の集付が並存する和泉式部歌の例を採り上げることから始めたい。

同（家集） 万代

和泉式部

△〇三〇△ よさのうみの海士のしわざとみしものをさもわがやくとたる垣かな

この歌は、現存「和泉式部集」では、「正集」下巻の巻頭に位置し、詞書を持たず、歌句は「夫木抄」と一致する。一方、「万代集」（二二九八）においても、「和泉式部集」に詞書がなかったゆえにか「題不知」として収められており、「夫木抄」がいずれに拠ったか判断しえない。

では、家集未載歌「かくしつつ…」と同じく、「家集」と「古来歌（合）」の集付が並存する一首はどうであらうか。

家集 古来歌

和泉式部

△三六△ みそぎすとあさきり捨てし程もなく今朝は夜さむに風立ちにけり

この歌は、現存「和泉式部集」（一三三八）に、「朝ぎり」という題のもとで収められているものである。「夫木抄」においては「立秋」題の中の一首として配され、「和泉式部集」での歌題は特に記

されていないが、それは「朝ぎり」が隠題になっていることが明らかであるゆえに、「夫木抄」が採り入れることをしなかったと考えられることも可能であって、「家集」が典拠になっているのを否定するものではない。しかし、現存「和泉式部集」では結句が「風吹きにけり」（風ふきにける）の本文を持つ諸本もある）とあって、「夫木抄」と異なっていることを思えば、この歌の場合も、「夫木抄」の出典が何であったかを明らかにできないのである。

ところで、家集未載歌三首のうち、残りの二首は、「和泉式部日記」所収歌である点で共通している。結論から言えば、これら二首ともに、元来、「和泉式部正集」末尾に収められている「和泉式部日記歌群」中に存在した可能性が高いと考えられるのであるが、その根拠は、次に述べる二点にある。

まず第一点は、詞書である。「夫木抄」には家集未載歌二首の他に、和泉式部日記歌が三首（「夫木抄」△三九九△△五四八△△△△（一一四九二））入集するが、以上五首のいずれにも「家集」と集付されているだけで、詞書は付されていない。いったい「夫木抄」は、その類題和歌集としての性格が強く、各歌の題詠性を尊重するがために、出典になった家集の詞書で、長く、具体性のあるものは、左注として採り入れる傾向にあるのだが、この和泉式部日記歌の場合は、その左注も付されていないのである。「和泉式部日記」から

採ったのであれば、その本文を整理して、それなりの左注にまとめあげることも可能であつたであろう。しかし、それがなされていないということは、その集付に明示されているように、「夫木抄」は「家集」からこれらの歌を採択した、しかも、「家集」には、日記の内容をまとめたような長大な詞書は記されていないかつた、と考えるのが自然だと思われるのである。

では、「夫木抄」所収の和泉式部日記歌のうち、現存「和泉式部集」にも見える三首を、「和泉式部集」所収の形態で掲げてみたい。

れいのかへりごと

(八四) 袖の浦にただわがやくとしほたれてふねながしたるあまと

こそなれ

↓「夫木抄」(二四九二)

七月七日

(八五) 眺むらん空をだにみず七夕にあまるばかりの我が身とおも

へば

↓「夫木抄」(三九九六)

(八五) きえぬべき露の我が身はもののみぞあゆふくさは悲しかり

ける

↓「夫木抄」(五四八六)

一見して知られるように、三首とも、その詞書が非常に簡略である。もつとも、(八九五)の歌に詞書が付されていないのは、「和泉式部集」において直前に配列された(八九四)の詞書を承けるためである。ところで、その(八九四)の詞書には「ことごとしううち

くもる物から、雨のけしきばかりふるは、せんかたなくて」とある。これは、和泉式部日記歌群中の詞書としては、かなり説明的であると言えるほどであつて、実際、和泉式部日記歌群全体を通じて、その詞書には単純な内容のものが多く、たとえば、「人のかへりごと」に「(和泉式部集)四〇一・四〇九・四二二・四一四・八七七・八一・九〇二」「人に」(同 四一三・四一六・八八二・八八六)など、「人」という漠然とした語を用いた表現に終始していたり、「ゆふぐれにきこえさする」(同四一七)「風ふき物あはれなる夕ぐれに」(同八九三)など、具体的な事情や状況が今一つわかりにくい場合がほとんどであり、「和泉式部日記」のストーリーをまとめるという態度は、全く認められない。先に、「夫木抄」が、ある程度以上の具体性を持つ詞書は左注として採り入れる傾向にあることに触れたが、それとは逆に、その歌を鑑賞するための具体的指示を持たない詞書は、「夫木抄」に採択する際に完全に省略していると思われる。これらのことを考え合わせるなら、家集未載歌のうちの二首の和泉式部日記歌に、「夫木抄」において一切詞書が付されていないことは、この二首が、元来、「和泉式部集」所収和泉式部日記歌群の中に存在したものであることを示唆していると考えられるのである。

では、この想定を、もう一点、「和泉式部集」における和泉式部

日記歌群の入集情況から検討してみたい。

現存「和泉式部集」においては、ちょうど「和泉式部正集」の末尾にあたる(四〇〇)ー(四三〇)・(八七七)ー(九〇二)に日記歌が入集している。現在のように分断した形で収められている理由については、清水文雄氏をはじめとする先学の諸論が存し、また、「和泉式部日記」「和泉式部集」間の關係についても問題があるのだが、今それはさておき、この歌群には原則として「和泉式部日記」中の「女(和泉式部)」の歌だけが、日記内での歌順に従って配列されていることに注目すると、その中に何首かの欠脱があることに気付くのである。

▼四〇〇ー四三〇(82)ー(84)の歌群中では、

(95)(100)(107)(137)が欠脱

▼八七七ー九〇二(10)ー(81)の歌群中では、

(20)(22)(24)(25)(27)(30)(31)(41)が欠脱

(12)ー(33)の間の和泉式部歌のすべて

※○数字は、「新編国歌大観」における和泉式部日記歌の歌番号。「和泉式部集」における歌番号(漢数字)と対照させて示した。

※家集未載歌の二首は(25)・(30)に該当する。

ところで、(24)ー(41)の一連の大きな欠脱部の末尾を占める(27)(30)(41)の

歌を載せる古筆切が存する。小松茂美氏編「古筆学大成」によれば、伝藤原定家筆「和泉式部日記切」と称される一葉であり、江戸時代初期の写と思われるが、現在までにツレは発見されていない。今一度、それをここに翻刻してみる。(濁点は私に施した。改行はそのまま示した。)

(27) 夜もすがらなにことをかは思つる

まどうつあめのをとをき、つ、

水いでたるみになむいで、

侍りつなどあれば

(30) いまはよもきしもせじかしおほ水の

ふかき心はかはとみせつ、

人に

(31) 夜ひとごとにかへしはすともさらにこの

あか月をきは君にせさせむじ

(27)の詞書は知られないが、(20)・(31)の詞書を一看すると、先に触れた和泉式部日記歌群のそれと同じく、かなり簡略な内容であることがわかる。しかも、この一葉が和泉式部日記歌群の欠脱部を補うような性質のものであり、さらに、その中の一首(30)が「夫木抄」所収家集未載歌の一首に該当することをも考慮すれば、現存「和泉式部集」所収和泉式部日記歌群中の欠脱は、編集の際、意図的にな

されたのではなく、偶発的な要因によるものであると言えるのではないか。つまり、元来「和泉式部集」には、「和泉式部日記」中の和泉式部歌すべてが収められていたのではないかと考えられるのである。

このように考えるなら、家集未載歌のうちの和泉式部日記歌二首が、「夫木抄」の見た「和泉式部集」に存した可能性は十分にあると言える。本章前半で採り上げたもう一首の家集未載歌「かくしつづ…」が、何に拠って「夫木抄」に採択されたかということは、前述のように断定しえないのではあるが、ここまで述べてきた中で、「夫木抄」の言う「家集」が、現存「和泉式部集」とほぼ一致するものであったことは、明らかにしえたのではないだろうか。

#### むすび

「夫木抄」所収の百首あまりの和泉式部歌について、その出典を考察してきた。「夫木抄」に施された集付や、現存「和泉式部集」における配列の反映され方、さらに、歌句・詞書の比較を通して、「夫木抄」の見た「家集」が、現存「和泉式部集」そのものとも言うべき形態であったことを確認しえた。加えて、家集未載歌三首のうち、少なくとも、「和泉式部日記」所収歌二首については、「夫木抄」の見た「和泉式部集」に入集していた可能性の高いことが知ら

れた。

このように、「夫木抄」の資料となった「和泉式部集」は、現存「和泉式部集」に直結すべき「家集」——和泉式部日記歌群については、その欠脱が生じる以前の本来的な形態のもの——であると言いつつよいと思われるのである。

なお、これまで述べてきたことは、「和泉式部集」それ自体の成立、及び、「和泉式部日記」成立の経緯の問題をも提起するものであるが、それらについては別稿に譲りたい。

#### 注

\*1 山田清市氏「原和泉式部集の原型と日記の作者——夫木抄を中心として——」（『平安朝文学研究』3・昭33・10月）

\*2 吉田幸一氏「和泉式部研究二」（『古典文庫』昭42・10月）

所収「夫木抄所引の和泉式部歌・解説」

\*3 「夫木抄」に関しては、その歌番号、本文とともに、『新編国歌大観』（角川書店・昭60・5月）によった。また、『新編国歌大観』は静嘉堂文庫本を底本とするが、今回、私に永青文庫本（細川家永青文庫叢刊・汲古書院・昭58）の影印、及び、宮内庁書陵部本（宮内庁書陵部編『夫木和歌抄』・明治書院・昭59〜63）の翻刻を用いて異同をとり、それ

によって、適宜、校訂した箇所がある。一方、「和泉式部

集」については、歌番号を含め、すべて、清水文雄氏「校定本和泉式部集（正・続）」（笠間書院・平6・6月新装版）

によった。なお、（へ）内に漢数字で示した歌番号は、原則として、すべて「夫木抄」におけるものであり、（一）内に漢数字で示した歌番号は、「夫木抄」以外の歌集のものである。私撰集本文の引用は、すべて「新編国歌大観」に基づいている。

\*4 「き、よりも」「木々よりも」とする諸本もあるが、すべて「夫木抄」に異なる。

\*5 この歌は「玉葉集」（一四六七）にも入集する。「夫木抄」と「玉葉集」の両者に共通して収められている和泉式部歌は、この歌だけである。

\*6 （\*3）清水文雄氏 同書「解説」

\*7 「和泉式部集」（二八七）（二九四）にも同じ歌群が重出するが、「夫木抄」の詞書などとの比較から、「夫木抄」は、（八五二）（八六五）の方を資料としていたと推測される。

\*8 「夫木抄」〔五四八六〕「きえぬべき…」の歌については、現存「和泉式部日記」では、地の文に混入したような形に

なっている。

\*9 清水文雄氏「和泉式部正集の成立」（『国文学攷』1・昭9・11月）など

なお、本稿は、平成十年四月二十五日、羽衣学園短期大学にて行われた和歌文学会第六十六回関西例会における口頭発表に基づいたものです。御教示をいただいた諸先生に、心より御礼申し上げます。

（ふじかわ しょうこ／本学非常勤講師）